

総合班の2年間の総括

坂 上 正 道

研究目的

SIDSの予防対策として、無呼吸モニタを用いたホームモニタリングの有効性を確認すること。

研究方法

1. 小型呼吸モニタ MR 10（無呼吸モニタ）の有効性を確認する。
2. 特定な地域を設定して、小型呼吸モニタ MR 10を使用したホームモニタリングを実施し、その有効性を確認する。
3. 本邦で使用する文献検索システムを利用して、内外の SIDS 関連文献を全て収載する。

研究結果

1. MR 10は、児に装着された圧力センサー（ポリ塩化ビニールプラスチック製）の空気容量の変化をコンデンサーが感知するタイプの無呼吸モニタであり、小型で電池作動式であるために家庭での使用に便利である。新生児未熟児における検討では、従来より使用しているインピーダンス方式の呼吸・心拍モニタとの比較においても同程度の性能を有することが確認でき、無呼吸モニタとしての機能は十分であると考えられた。
2. 北里大学病院を SIDS センターとする神奈川県北部地域において、所轄保健所（相模原、大和、厚木、津久井）及び各医療機関の協力を得て、MR 10を使用したホームモニタリングの pilot study を実施した。人口動態統計による昭和54年から昭和59年までの神奈川県 SIDS 発生率は出生1,000人に対して0.02、0.03、0.09、0.10、0.13、0.16であり、欧米に比べかなり低いものであった。ホームモニタリングを実施しえた症例は7症例（未熟型 SIDS 1 例、SIDS 兄弟例 1 例、無呼吸症例 5 例）であった。モニタ使用法は概ね正しく、アラームに対する対応もほぼ的確であり、家族の精神的安心が得られる場合が多く、経済的負担も許容範囲内であった。以上よりホームモニタリングは実施可能であり、有効であると考えられた。
3. 2年間で SIDS 関連文献約200篇について review した。
疫学では発生頻度は従来通り地域、人種による差が報告され、従来から知られているリスク度のいくつかが再認識された。原因に関しては、sleep apnea 及びそれに関連した呼

吸調節機構の異常が最も重要であるという傾向は変わらないが、未だ循環系、感染症などの多岐な方面からの論文も散見された。ホームモニタリングに関しては、実際面で依然色々な問題が残されていたり、学問的に SIDS を防ぐ証明はなされていないものの、未然型 SIDS 症例の早期発見と早期治療及び家族への精神的な支えという面で背定されている。SIDS の家族に対しては、専門的な医療チームによる適切な支えが必要であるとの論文が多く見られた。

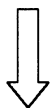
ま と め

SIDS の発生率は出生1,000人に対して0.16（昭和59年神奈川県）と欧米に比べかなり低いことが判明した。予防対策としては、現時点では性能及び実際面から携帯型呼吸モニタを使用したホームモニタリングが有効であると考えられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

SIDS の予防対策として、無呼吸モニタを用いたホームモニタリングの有効性を確認すること。

まとめ

SIDS の発生率は出生 1,000 人に対して 0.16(昭和 59 年神奈川県)と欧米に比べかなり低いことが判明した。予防対策としては、現時点では性能及び実際面から携帯型呼吸モニタを使用したホームモニタリングが有効であると考えられた。